

48号

かいはつ

題字 新香山中学校
3年 秋山友亮



「小中クリスマス交流会」(六北小)

「総合学習」(葵中)

岡崎市現職教育委員会 特殊教育部会

平成15年3月6日発行



「ほめる」をどうしよう

岡崎市就学指導委員会
専門医 (小児科医)

早川文雄

子育てや教育において普遍的課題が「ほめる」ということで、このことは健常児と障害児に違いはありません。叱りつけたり励ましたりも大事ですが、「ほめる」ことの重要性をとくに強調したいと思います。

子どもの能力における個人差は、もって生まれて変わることがありません。一方、子どもが挙げる成果は、能力と同等かあるいはそれ以上に意欲によって左右されます。課題を達成しようというその意欲は、それまでの成功体験の蓄積によって育っていきます。成功体験とは文字どおり「できてうれしかった」体験であり、自己満足に添えて「ほめられた」体験が意欲を促す大きな動機になります。能力の低い子どもは「できる」量が少ないので成功体験が乏しく、課題の達成意欲が育ちにくい状況にあります。したがって、もって生まれた能力差以上に意欲面で差が増幅し、成果で歴然とした差がついてしまいがちです。

もって生まれた能力差を嘆いても仕方ないのでその差を意欲でカバーすべきですが、どうしたら意欲が育つのでしょうか。それは子どもを「ほめる」しか方法がありません。自己満足できる成果が挙げにくい子どもは、寄り添う人が「ほめる」ことによって成功体験を蓄積します。「ほめるようなことをしてくれない」とぼやいてはいけません。「ほめる」ためには本人の得意課題を与える(取り組みやすく成果を挙げやすいから)、課題は簡単なものを与える(達成感という成功体験を増やし「ほめる」機会を作る)、そしてできなくても取り組んだ姿勢を「ほめる」(「残念だったね」ではなく「よくがんばったね」といったことが必要です)。

ほめられることが子どもの達成意欲を育み、その結果として能力差を縮めるような成長を生み出すに違いないと信じています。

友に 支えられて

岡崎小学校長

野村正文

六年生が最も楽しみにしている修学旅行が近づいてきた。ところが、障害児学級と協力学級になっている六年一組に困った問題が起った。交流授業時におけるA男のいたずらである。修学旅行の班決めをしたのだが「A男と一緒の班にはなりたくない」という者がほとんどであった。担任は、この問題について話し合わせた。「一緒にいる方がいいよ」という子は一人だけ、多くの子は「本当は嫌だけど、なったら仕方ない」ということであった。「絶対嫌だ」という子も二人いた。このような状態の中で、A男を交えて班決めをした。どうなるか見守っていると「絶対嫌だ」と言っていたB男の（彼は軽度の知的障害を持っており、両親は定期的に学校で教育相談を受けている）班に決まった。B男は「嫌だけど、A男がいたずらをしていないと約束してくれたら、仕方ないけどいいよ」と、渋々承知した。

修学旅行の当日。うまくやっているようだと思っていたら、奈良に向かう電車の中で、B男が「いたずらをしてはいけない」と言ったのにA男がいたずらをした。もう、最悪だ」と、訴えてきた。A男は「ごめんね、ごめんね。もうやらないから」と謝り続けている。二人の会話を聴いていると、どっちもどっちかなと顔がほころんでくるのだが、心配していたが、修学旅行は無事終えることができた。

ところが、学校でまた、A男のいたずらが始まった。「いたずらをしてはいけないなら、いつでも仲良くできるけど、もう我慢の限界だ」とB男は担任に訴えてきた。A男の担任を交え、四人で話し合った。二人が近づくと、A男がいたずらをしてしまうから「しばらくは、絶対に近付かない。話もしない」という約束をさせた。しかし、数日後、用事もないのでA男の教室の前をうろうろするB男の姿を見かけるようになった。

A男とB男が本音の部分でぶつかりあっている姿を、クラス三十数人の友達と担任が温かく見守っている。一人は、心を成長させる最高のライバルではないかと思う。

あそびにきてね

六北小 おおぞら組

今年度より開設されたおおぞら組は、一年生と四年生の女の子二人です。いつもつばさ組さんと仲よく活動しています。

一学期には、くぎ打ちや五平もちづくりに挑戦しました。

二学期の研究授業では、さつまいもパーティーをするために茶巾絞りの練習をしました。

十一月には、待望のうさぎを常盤東小より譲っていただき、



とてもにぎやかになりました。うさぎのプリンちゃん人気者です。みなさんも遊びに来てください。

学級スナッパ

初めまして

本宿小 四組

本宿小の四組は、今年度の四月から仲間入りをさせていたいただきました。四組では二学期まで、一年生の女の子一人、四年生の男の子一人、計二人で学校生活を送ってきました。しかし、三学期に一人転校してしまい、今は一年生の女の子一人になってしまいました。

たった一人の四組ですが、毎日元気いっぱい勉強や運動を



がんばっています。特に今は、マラソン大会目指して、毎朝かけ足をがんばっています。よろしくお願ひします。

そよかぜ相談室から(4)

相談員 本多 末子

今年度十二月末までの相談件数が就学、在学児込みで百十件を越えております。障害の程度によっては、専門医の先生方のご指導、お力添えのもと相談活動を進めさせていただくことができました。

相談においては、子供さんの成長過程、保育園等の様子について保護者の方からお話をお伺いするという姿勢で臨んでおります。その中で、希望している学校を見学した上で就学先を考えたいと言われる方が増えてきました。（学校側には、ご迷惑をおかけしますが感謝申し上げます。）

見学された保護者の方から、「気持ちよく参観させてほしい」「在学児と共に活動させていたたいという我が子を見て、安心してこの学校に任せられる」という喜びの声を聞いております。

一園の相談で十分話し合いの持てなかつた方には、何度も来ていたたいで、子供さんにとって最良の就学先であるよう、粘り強く話し合う機会を持っております。

事業所見学会

矢作北中学校

これまで市内中学校全体で同じ日に行われていたものが、平成十四年度から各学校の実情に合わせて事業所見学会が行われることになりました。そのため、職場体験学習と日程を合わせて行えるなどゆとりをもって計画・活動をする事ができました。

矢作北中学校では、卒業生が学区にあるフタバ産業に就職をしたので、そこを見学することになりました。当日は、担当の方のとてもいい説明を受けました。先輩の仕事の様子に感激し、質問もすることができました。

生徒の声

先輩ありがとう

M・M

私たちは、フタバ産業に行きました。初めて行きました。鈴木さんが案内してくれました。大きな鉄板がありました。ロボットとかクレーンが運んでいきました。フタバ産業は、いろいろな仕事を

していました。仕事を見ながら歩いていくと先輩がいました。1君は、車のナットをつけるところのあなをあけていました。楽しかったです。教えてくれてありがとう。

先輩の話を聞いて

成瀬 博明

1君に、どんな仕事をしていましてかと質問したら、「部品にナットをつける仕事です。」と言ってました。学校では、工作や国語や数学を勉強するといいて教えてもらいました。

はじめて見たロボット

川添 力也

フタバ産業では、いろいろなロボットが部品をつくっていました。いろいろなロボットであなをあけて、切ったりするところをはじめて見て、びっくりしました。人ができないことをロボットがやってくれて、すごいなと思いました。

先輩の1君は、ものをつくったりするのがすきだから、この仕事にはいったそうです。目で六百こつくるからたいへんそうです。ぼくもあのような仕事をしたかった。ぼくもあのような仕事をしたかった。ぼくもあのような仕事をしたかった。



保護者の声

事業所見学会を見て

M・N

今年からは、交流会や講演会がなくなり、他の学校との交流がなく残念に思いました。

今回は、先輩が勤務しているフタバ産業に行きました。子供たちは質問をたくさん考えて、先輩に会えるのを楽しみにしていました。見学の後に記念写真を撮りました。

これから高校を経て、社会に出るにあたって「この子には、どんな職場が合っているんだらうか」など不安なことばかりですが、本人の出来ることを少しずつ伸ばして行こうと思います。

竜南グループ研究発表会

豊かな人間性を育む教育活動

竜南グループ（竜南中・上地小・緑丘小）では、平成十二年度より小中連携教育に取り組みんでいます。

本年度は、昨年度から引き続き和太鼓を通じた交流活動を軸に実践してきました。

通常の学級との交流の機会をより多く

ふれあいデー、七夕会、竜南たす会など、特殊学級主催で、上地小五年四組、竜南中三年五組の友達と合同で活動する時間をより多く計画しました。本年度から、特殊学級だけではなく、通常学級も二学級が兄弟学級となって活動を共にしています。お互いの個性を認めつつ、力を合わせて一つの活動に取り組みできました。

ゲストティーチャー 上地八幡太鼓 應呼さんと
三校の特殊学級で「竜南たいこのリズムを練習しました。活動場所は、竜南中としました。場所に慣れ、人にも慣れ、集中して和太鼓の演奏ができました。

研究発表会の当日の授業では

中学校の授業時間五十分間の発表をしました。

一、竜南たいこの発表（特殊学級の児童、生徒だけによるもの）
二、六グループに分かれて太鼓の練習や振り付けのアレンジ
三、グループごとに竜南たいこの発表

一から三のような流れで授業は進みました。

児童、生徒九十名、教師七名、ゲストティーチャーの應呼さん十名と大勢で太鼓に取り組みました。当日までの練習回数を多くとったことで、特殊学級の子供たちは、自信を持って太鼓の演奏ができました。

三校でスケジュールを調整して集まることは大変ですが、異年齢の子と過ごすことで人間性を育むことにつながったと思います。

和太鼓の発表は、上地小学習発表会、竜南中文化祭へと発展していき、大きな励みとなりました。



特殊教育が

好きでした

小椋弘子

昭和五十四年、特殊教育との初めての出会。募中で、十か月の育児休業を取らせていただいた後の新学期からのスタートでした。

三月、校長先生の面接で、「二年間やってくれるか」「はい」の十秒もかからず決まりました。校長室を出ると教務主任の先生が、「引き受けたのか」と驚かれました。私の前に現れた自然な道でしたので、その反応の方が不思議でした。特殊担任の受け手がなく、難航していたとの内情を後で聞きました。

私には特殊教育の知識もありません。生単・養護・訓練・自閉等、耳で聴いても文字すら浮かばないところからの開始です。とはいっても、何かを教えたいという、今思うと独善的な姿勢はありました。特殊学級担任って事で、お守りをしていくとの風潮。特殊な人がかわいそうな子たちと特殊なことをするところ。そんな偏見がま

かり通る空気が強くあったことへの反発でもありました。

とりあえず、踏み出そう、そんな矢張り千万年学級担任でした。目の前の子どもたちと過ごし始めると、小学校の学級担任の感じと、とてもしっくりくるものがありました。

障害としては様々な情緒障害と学級の生徒たちですが、向き合うと本当に不思議に魅力的な子供たちなのです。常識と信じて生きてきた、三十何年間の自分の考えや行動が通用しないこと

の新鮮さ。目が覚める思いでした。『少人数指導で総合的な学習を行い、個別指導を大切に、卒業後の社会人としての自立を願う。』二十年以上前の学級のことを、現在の教育用語で表現すると、そうなりそうです。また、当時は、卒業後は就職する子がほとんどでした。この就職活動がほとんどでした。この就職活動も、世間の狭い私にとって、初めての社会体験でした。作業学習で、仕事に関する構えや根気などを

よくくむ陶芸、栽培、織物等試行し

ました。指導より自分が夢中になったのが正直なところでした。

そんな時も、常にリードし示唆をくださる周囲の人に恵まれました。それは退職するまで続いた私の幸運です。保護者や特殊担任同士も、人間関係は苦勞知らずでした。何年もの後、当方は最高と満

足していても、相手からはどうだったのかと、やつと気づきました。それほどの居心地のよさでした。遅ればせながら、感謝。

また、学校の枠を越えて、よく話し合いました。児童生徒のケース、学習方法、評価、特別部の楽しい取り組みについて。お茶の冷める

のも忘れ、何時間も。みんな、特殊教育が心底好きな仲間でした。こうした時間や機会を作るとい

修学旅行

城南小 山下かすみ

六年生の時に行った修学旅行がとても楽しかったです。特にグループでいろんな所を見学したことが思い出に残っています。

自転車通学

東海中 村手 藍

私は、小さい頃から自転車が大好きでした。近所の中学生は、みんな自転車通学でした。私は、お母さんの送り迎えでした。一年生の夏休みに練習して二学期から自転車通学にしました。あごを五針ぬうケガをしたけど病気で休まないようになりました。

成長

山下 幸子

城南小には、特殊学級がなかったのですが、かすみがついて越して城南に通うことになり、特殊教育を作ってもらえることになりました。親

学級で過ごす時間も多く、特殊では下の子のめんどうをみて、いろんな面で成長したと思います。小学校的の六年間は緑丘と城南の先生にお世話になり、大変ありがとうございました。

自信

村手 和子

通学に変えました。当初、ルール違反続出で自転車禁止寸前でしたが、先生のご指導と地域の方の温かい見守りのおかげで「自信」という成果を持って卒業できました。本当にありがとうございました。



平成十四年度愛知県特殊教育推進連盟顕彰児童生徒

- ・第二十二回東海日日新聞社学級新聞コンクール 富岡小 五組
- ・印刷新聞の部 金賞(豊橋みなとライオンズクラブ賞) 美川中 六組
- ・印刷新聞の部 銅賞 大門小四年 鈴木 優太
- ・第三十八回読書感想画コンクール
- ・岡崎市教育委員会賞

表彰

- ・平成十四年度愛知県特殊教育推進連盟顕彰児童生徒
- ・第二十二回東海日日新聞社学級新聞コンクール 富岡小 五組
- ・印刷新聞の部 金賞(豊橋みなとライオンズクラブ賞) 美川中 六組
- ・印刷新聞の部 銅賞 大門小四年 鈴木 優太
- ・第三十八回読書感想画コンクール
- ・岡崎市教育委員会賞